○玉山人家集一之冊（知足坊一瓢の句稿）

文化二年前より全十二年十二月

○知足坊一瓢の句珍（附録）

中村俊定文庫
文庫 18
990

玉山人家集

一冊

墨変ふし　欄外まちがいあるを訂す

他石氏写本の記

一瓢句存

大正十一年十月、未だ存命中、本行書を送付せられし師の書簡

「師は少年時代を五湖に過せられ、一瓢の俳号を用ひられし時、古長谷の中なりしもの

を師とせるものとて、五湖に於ては、古長谷の中なりしもの（俳号玉仙）

を収め置きしものそ、高濱虚子氏八行罫五十枚の冊子の表紙に

「句帳」と題せられ、「玉仙」と題せる一冊」と擬外の筆

る一瓢句集の句留めて上掲の「でかけ点：後ていろ」

其外、「再来まし」と記しあり、句中「し」を「ける」とせるもの

位で、師が傳えられしまゝ、句中「し」を「ける」とせるもの

外の七部集註釋の写しに、何れも俳世界の句、「しの外」「ては」「俳世界」「但」「と」「る代」

高橋俊也一七部集の形態と他石

内容句数

文化二年	二七
三年	一九
四年	一二
五年	四七
六年	四八
七年	三九
八年	六八
九年	一一三
十年	八九
十一年	七六
十二年	九八

京都帝国大学図書

朱書は水谷書の

玉出人家集一冊（掛外ヶ）

（年号の記し次ぎ文化三年とあるもこの一ヶ年分い恐らく文化二年の部ならむ）

他石氏附言

七夕ゆ星つかりしも男ゆ
白魚ゆ秋田の杉の匂ひゆ
野ゆ花を米つくおとゆ借みゆ
よく見れば後手の人の部ゆ
花ゆ俺ちけるも すゆ汁
杉菰 青みゆ 俺 彼岸ゆ
明やさきくのもとゆ山家ゆ
絶るるも 五月雨せい 破屋
秋十九 耕と共る 秋ゆ 板橋の 京ゆ かの 岩俺ゆ

水谷

中村文定文庫

計　六三六

くぬぎ炭の節々と篠の折籠の塊のさまやまを
堅き土 接ぎ土のたゝかひ あるいは 図面の
是非 ― 之 ― 之 西篠の反とたゝかひ
さて この 宵中の十りのはりの公仁葉の絵は
国西の踏陽の張たり けり ゝたゝ時し 無しめ
難西し 柴門の手を 拝て 西 ゝ を 拝り 折く ゝ 郷を
惜ひのみ

○ 老ゝめの筑紫へ 句のわりみ

みゝ ゝ く 自耕探之江

○ ものすごくのこと の 恋ある

魚 ゝ い 孔 ゝ ゝ 苦 ゝ 岩 ゝ 里 ゝ

之 陰 ゝ ゝ ゝ 寂 草 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ く

ゝ ゝ ゝ 偽 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

一瓢の父は杉田か

[illegible]長月の初旬その[illegible]一筆と共に
本牧杉田より父の廟をおし金澤野嶋
すき[illegible]し浦賀より[illegible]より[illegible]
房總をかけめぐりまれ相の三崎より帰
路し[illegible]名依知[illegible]峠を越て
即日出天す延山[illegible]
の紀行も[illegible]の[illegible]の[illegible]
十[illegible]八[illegible]
心[illegible]の[illegible]の書は
（この冊子を筆せし時[illegible]十年の後とぞ[illegible]）伊信氏の附言

○ 多賀[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

○ 偶の[illegible]
素[illegible]
[illegible]すと多[illegible]
三崎の[illegible]

○ 蛸つく[illegible]
お[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○ [illegible]
[illegible]

猿橋

さ[illegible]橋[illegible]

（文化五年伊豆伊東人松十郎猫いさりの伊サガミ文水句より但し昔の太の白中）

石和格岡より出門二王門本堂庫裡七面稲荷の社なり
門前北へ半町ばかり法経塚あり格岡川より經道拾えんもこの塚とて
拾くたく格岡の石の砂の寄
山室山なり法論石とあり 日蓮記
稲荷の磨ともあり石めりなり
七面山の宮と書木門と陽
ものくらき情くれ埋もれたるか
その外いとけなつまうす 芝 昔よりよく書く文
さ四月の梅の俤を年
白雪の白つゝうの月はかな
折せんやの山ちなみ二りの
食うの梅もむ立むく

文化三年寅丙寅

姫きい命の宮もつゝ分の
うくひすも鳴すゝ言や家の
出つくと鳴ぐ梅の
陽とう日の昨日陽し芽葉
似と宗のいくらもあるを
芽もを、ものもしわ家の
吐ばけ われ山のあること
貝みを背中の雑ものも
芽
うちてる父母の人はうりう
隅もあて宣の言ものの

鍋掻のつと矢さらけ夏の月
蓮咲て蛙の空さるるかりけり

秋

稲つまり雨るるるる土くさし
去らつゆや中の八のひとり起

雨二の秋ふるまん飯すけり

つゝと松の中より花芒
されハそ京の月秋の庵すゝ

秋ちるとみるもくるる草家
埃吟やひたれいはらかの

花四月卯月卯月書
蛙掻く苑のくしろの戸ふ

雷いかみへありしか者の子
夏

青梅のこそ孫ふれはそ蛙
夏ふる。ちるとそもかんとる

秋

蓮のまるみのぬけもりけり秋

冬

ふりさけみたるとおるく。松ふる。
お宮行すれのら別て穀ふし。食
さるする初るる。義する。
蓮
一ふる足ふそ。きそ。の川。

一瓢の観佛

ぬとけと黄金い仏好れいあるのるまたるし とも中捨ぬ

ところで小判も[illegible]る抜頭巾
表芽や鶯に越えて[illegible]ものと。
梅禁の寺後藤未[illegible]りけり

文化五年 辰年 戊辰

ひとまつなる お三も起て[illegible]花の春。
いたらんの[illegible]はやへる白[illegible]月
[illegible]汁の[illegible]春の[illegible]
[illegible]を灯さくとも[illegible]梅の花を
[illegible]の[illegible]しの六[illegible]あみだ
[illegible]の[illegible]梅[illegible]
芽
[illegible]春の[illegible]

とより、るとは加せり
けづくかるべ

お三、下婢の通り名
長松が私の名で表[illegible]
[illegible]坡吟草」の如し 長松は幼
少の時即り元服前の名
お三はお袈裟と書けり

田舎の煙りはるれて若葉[illegible]
定宿も通り過ぎて春の[illegible]
[illegible]の門や糸ぬく[illegible]の峠の[illegible]
[illegible]のさ月くさくも[illegible]

世話なる愛きに

世の中も業のさきなる晩の[illegible]
山伏の[illegible]桐の花
はるの春気地を

[illegible]
[illegible]の[illegible]あすの[illegible]
[illegible]の曲て書[illegible]の月
[illegible]を曳て[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

○ 雨降る日のさびしさを狐の祝言とよぶ

○ 物ものゝ塚を
延つけて新はそてやる青田かな
仏むくのやとゝむつらし仮の宿　ソロそろと
岸の捨てさせおく山鍋うの
一筆を書れさうなそこそこ本。
さころのおもてやとも菊の花
一休の寄すゝ寄も世婦く
割る句を傳　ものせとそ
そめねとゝ寄ある大徳まれは
魚くはぬ身してむすめはみ
地きつねの嫁とる夏也る会句

かまくらのうるさくちりぬ　いさの花
芋のつるやらまへらの芋
一圓扇玉かさのけて芋の月
秋
三、月のうち風さくたる芋の月
紙ひくもてんぽの月の月
高くきこと言ふ句すゝ
山男庫の屋も原れぬ地中松
夕暮の粉すりたる蕎麦
かくし酸の利て高けさ
出き高のをつくり高い

傳法？

ソックラは ソックリの地方訛り
豆相あたり 全部 とゝ意味

山雀の塒（塔）の明かりなる夢ひとつ
桐の枝に一云ひとつ　れの
夏見塚八景を探勝
五灌のはちすの似くれの
冬

塚（ちり）のは塚がるべー

覚塚　谷中本行寺内

冬花はらのたちゆる秋ひとり。
十月も終りを残す秋の南
あり年の年ひらく秋の。
太　資順公所七月無了　拾拾ぜられ

ひとつ冬の月の光　寒さ
朝霜田炉裏（庭をつくる）もも
十月も終りとなるまでのこと

懇招　あく人　懇請と
先キ二丁ほどに成美老
ちゝに同書見あり

ツン字、文化九夏、ツン走しアリ

嘘ばかり　冬の月
世の中のおくれきたりたる常あらいなく歎かる人の夢
妙音も枯てなるまの　北庭花

文政四辛巳　題義
伊豆一覧

文化九辛巳　三三

春風を妙のらつき宵家の
小雨の夕ひらく　とれと　秋の咲
花くとあせる置に　花の
雀のる　夫はりたり　春の
蕉の葉　口上の長さ
すいと　来れの　花のこれ
藥禮　つくわす　花の中

文達（ヤリスギ　ちゞ〜　ちゝ）

でうくわす　山ッ夫人（御近）

下前の長なるかはすとなる事
嫁とらぬ時はつるものや 橋光り
その上いと丸なるなり 書の香
山袋の巻あけたれば 誠の香
紅のおもかげ 秋の那
食堂を見る時 山さくら
河野某母像みるに たれば
白樺こはさを 書のわさ
桜
さくらとみるやうに 書の蘭
梨花 桜 桜 桜 桜 新 動
紅の色 葉もいろ
文化八年 おろく家

まる塚 墨色 白
利根の紙の のまれて出 夜木立
用去不義を 蝿たくさん もちもちもかさ
桜
紅酒の 楽し 端の家
南無阿弥陀
大仏をこれ 年 深山人
何 はつて 夢月
面白 さくと 紙せよ 雲の峰
夢のおの 分りて 楽し
あるまる 行 迷 小 大 ひる

横 墨 御

菩提何年の家　何年菩提（長年月）

大根咬　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]あるから留守の家もの
[illegible]を[illegible]て[illegible]の後
[illegible]を[illegible]て[illegible]
[illegible]も[illegible]かれて[illegible]
[illegible]の[illegible]薬[illegible]の[illegible]頃へし

元七年午 寅庚午

元。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]集何[illegible]痩[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅梅やおりてさくら哥舞妓めく
葉桜のまゝ咲けるいとやひとりの子
つひぢや茶の木のあるもむつかしき

一野の観佛

さく花をうたれ紅葉のあるあるかな
花さかり弾も動はとやもあちらもち
立ぬみするれ家家や後ちひとかたけ

蕉

花八年
秋の色

ふれも袷者やとあるもかな
夕鳥をおれて出るり尺八の音
それまでは吸ひはさて花ちる
帆

花の
秋八年
秋の色

月はあるあるあるあと茶の
月

知の貞 西向は見たる扇を
天

時雨るゝ嵐の鼓の紅葉なほ
茶の花のやくたちかるく長閑なり
十月の空を見るつらく
ゆらさまとかくれくらこそ
弥生月そとらしやうに能者数
ゆりやすき秋ふるる弥生月
はつ雪ちやりくさすて秋なる
さゝ雪を切もなくする雁うめく
雁らも年去後の茶の中
名振義いすや雪数のあと序

蕉門版年表
一野

蕉袋 しをあく 役立ぬ 負 笠 出た語まりとる
隠小競 カクレンボ

文化八年 辛未

堀大の[illegible]れ[illegible]次い極楽か
[illegible]れて嘆き出すや炭俵
[illegible]鶴い何を[illegible]る寒いん
[illegible]は[illegible]め宅賛[illegible]

けさの雪

文化八年 辛未

百の柳枝着の物から見ゆるり
[illegible]のたとえぬ[illegible]や 物ゝ家
[illegible]中い隠もされ[illegible]
[illegible]の枝のあちらも八重霞
年[illegible]みたきやゝ[illegible]
てらちんの紐も潜る柳かな

猫の恋 よせても[illegible]あはれ

四の欲

芋柳[illegible]
[illegible]家[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]は[illegible]の[illegible]人の[illegible]
[illegible]山[illegible]れ[illegible]家[illegible]
葉の[illegible]と[illegible]釣瓶から
[illegible]
[illegible]
時の来て蓮[illegible]
[illegible]の枝
[illegible]

四、茶碗等焼き継きすること事の不能なれど小さく破砕さるる

文政四巳年 伊の豆熱海[illegible]の[illegible]
[illegible]年や勿体[illegible]
[illegible]空
長塩平十郎父の[illegible]
[illegible]

[illegible]人のまち[illegible]目も[illegible]
死ぬ[illegible]ぬ　[illegible]

悼　柳江　○俳名を卒[illegible]

[illegible]はうものら　梅はな

[illegible]のねはる端す　[illegible]のら

春

と問ひことの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○文化八辛未年（成美家集春）　哭逝江

○文化八辛未年　[illegible]

つつみは柳のめんそ[illegible]
[illegible]月の[illegible]
ちさらをいくらも[illegible]
まれも抱てや[illegible]
あもるなげす　[illegible]
大力持ものつけ[illegible]
[illegible]ちんを[illegible]
[illegible]目の[illegible]
三り月る晴[illegible]
[illegible]人[illegible]

ぷん？

[illegible]

木からしや世を捨て花も梅。
春の末る捧の先るゆたるる

芭蕉忌

あたらしく人の色のつく時るかな。

文化八年
おもはずしたは捨笠赤蕪。

文政七年
名所今題集
自立一歌

ゑちの春ゝれも主婦と見ゆるなり

漢世里陰を過て
江の岸や何か定て鳴ちどり。

菜の花や人の来ぬ日はそのあるし

風吹よもちみのつくれ松の風。

文政三年
相模国
秋一歌

望人のせを引かたる男ゝ
指明ては他人のやうにちどり。

文化十四年
芭蕉葉集

極楽ハ余所とも見ぬ火鉢かな。

十月や家根から咲く春の夏

三文ゝ菜も捨ずに残りけり

年寄の口ハあることゝ思ふ

死たいといふ事さきや室のうめ

亡のゝ可愛や今の足袋子

君か代の哥もあれる麦を苅

口切や捨たやうる雪か降る

投ゝもちゝ(ゝ)ゝ冬至哉

蕎麦刈て降か明ゝ不二の雪

[illegible]ゝ南国の形も見ゝ

をゝ直ゝ直ゝ中山伏

年寄の死たいと
麦飯を食ちゝは嘘
とりゝの傍ゝり

針葉の年月はしわもるかう
こそなるや棒のやうなる人の手
葉なども知らぬなりなる海龍かな
はなもいろいろ面めもとよみ書り
世界も一抱なる根屋敷
般けをまらむやうなる はあらず
芦根ておりちなる黄ばみなる
三月はいるる頃 孔てかられなり
水仙のひとりきりなる 孫はなれ
ちるまのはおのくいろいろのとし

元九年中春

一本の杉なる事し年の春
をはるなる春中おのる 袂を
かうしたり煙つる事 春の月
鶯のこえ雉もはるめ 水ぬるみ
鶯の叶の際なるや 梅の蕾花
若草のちるる事も 鶯の子
草ちるや何やらかやら 掃のこと
西瓜か秋 茶ちる 雀の子
山吹や下の連なる 蛙声
あと吾子田螺 孫名事
月のやうなる 田舎の春の雨
つまれて 絵なるなる 次平

俚言 金澤

文藝題叢 但三一編

あるまく春か行て摘の勝
紀の月や　これはしたちの春のうり
時の生て　ちるをみるやうすを
鶯かた長方も　つはあかるの
みよ　世の歌　もて時の　の
文藝題叢 伊勢一編

ちるを　花の　を　接穂
あるみえ

酒

世の春や　気運ひれ　の
蕪も　ひなく　の
時こい　とれ　春も　夢

時くもれ

花の　曲　家の　時
永　を　へ

三輪大神

紀伊の長方　和歌　光常
初代　十　歌　古歌

切つちん　ら　時　きん　の
萬代や　高砂の　松　のひら　と

大和多武峰

芝

ちちを　ひとの　世　伝か　花の　伝
白髪の　こさる　紅　て　を　麗
髭　ちる　つは　らか　夏花
時　あから　つ首　出す　社若

ツツ首　とは　賜　と云ふ
ソ首　ソは別に老る

永根

気の毒や　死　をうて　ちる　孤
嫁　る　曲　くす　し　若葉かる
吉松に　伊　不孝　か　高治
日さす　上々　去　の　ち　ある

露伴（宇田川）
内藤下野守　磐城平藩主
京保十八年九月西歿　七十歳

田ちの葉子て蛇をてまつる
みちの国もものめらめく湿の舟
相模路はひらたち月の春の秋
松着るは　　秋の　　へ立
草の芝てすみたる草家の郷
蛇食くまつあてくるを称る
死こそ　　て蓼の　　鶏男かる
草の上の　　蓼も　　さかつり
よるとも　　蛭の世　　くに斗て
五人　　何の生も　　蟹蟹
食足の　　蛭もまれて　　物いけり
嫁へる　　指ハさ　　ねと　　ちの子

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁ばかり一かのとくしの清水流れて岩間をくぐる

とくしの水　　清水の舞台ト云ふ　　丈丁ニテ

但し此の歌西行の歌集　　なる　　書けり

とくしの水　　祈願　　（とくしの水）

仏なる　　食足　　かくし　　秋の

夕の陰　　ちる　　秋の

とくしの　　あらは

身ひとつの　　あつける　　柳の

はれの　　ひらく　　前

文を　　流れて　　仕事

他ことも　　ぬて　　ちて

会歌さる　　五の　　鮮る

身の陸や　　陸り　　ちて

夕ちて　　陸ます　　ちて

銀平とのいる　　雨ス

八ツる　　賢ます　　ゆ

文政三年庚辰上洛人里左右　　ものかつぐ　　伊豆一駄ト云ふ

（文政下野）　　彼清帰　　岩間の　　住ス

水流れ　　ある　　岩間の　　はれと

岩間こかし　　はれと

（無常集）

（無常集）

（文政）

（清水の舞台ト云ふ　丈丁ニテ）

但し此の歌西行の歌集　　なる　　書けり

（無常集）

（無常集）

（文政）

（文政）

（文政

一瓢の好酒

炎暑絶えなく根岸三輪の日蔭を伝ひて秋香園の
様の傍なる徳利売りの声みな潮吹き男山と書附たる瓦の
ひさごに酒し暑氣も却て生を折て鬼角す件の徳利席
上に長くとり呂飯日完と絵て異る事ず

暑
茶いめもなつく山葵の絵れかり
三月い新年陸の事りけり
会歌時やさらく風のさらくと
楽書をしたりやうの聖の峰
いや極てかりの表よく猫先り
雑歌のいつなて草を庭をり
鬼の首はさくらの訳室かる
さらしみをちやはやいの雁ま

形代の面倒なりと
山ふもや流れるる年かよる
かゝ徳利
芋と呂家を掘り
墨絵の果を書るる義の和
そよ吹や煙のりの勝の光
君ら代を去るく風つ芋花の
世ら一て浮世の芋の月

秋

悟りのやうやりて奇の事
気も南かならて老のやう長の年

福原覚古

しかすがに仏遺言の花
出の事を高野の山も　後の夢
まくの豆腐も時の雪ぬれて
世事は他人にあらで弥陀
一日の俗談は三日の月
俗世のくらしをばゆる芝の戯
笑館より帰れる人の歌
一日の秋を往かりし蝦夷吟
弱年の歌を見るとかの弥生
俳諧も気の毒なるかな　秋の雨
紅葉やさらしの死　芭
しくはみたり庵の寒さから内の

嘆どの出て下さるな不月今宵
一瓢の短冊

聖命い蒼表も知らよよ嵩山の
真実は味しまくよ知みる
老て寂莫を好む風雅の初
笑程よりやもちとらの秋の月
の高の拍子のつも　月が出
雨ばらし波はきらきらし　芭
蕉翁

菊の花は蝶のやうなる心
枯るとも耳の云いの地まで
鶯の初ものつく小山月
雄三粒はかりも蛙　菊の紅
云つけてはきりすり　高子

文化四年

水仙の肉の色もうすく咲舗る
犬の鼻蕗の山吹もうつるなり
寺門は西日ひかる紅葉の
孫会菊の枝ぶりとはいへど
梅の花の外うゑそめる
寒さもうすらぐ兄弟の家
冬の梅さき岩のもとに
霞ながら花二の山
世を余所に梅の花
風の吹くまよ
三人て蒲団ひとつをあつし
飾りき 鶴のつらつよみうみ

今は昔、道貞、高兵衛、平助と云し時其角がもとへと凄きに
蒲団ひとつを三人あつしと
跡さて次座に座なる夢あれや
夢中花笑羽（千提灯）

山茶花や蕭条曲げて
梅の蕾も色ひかる
寒月を霜一本のひろみうる
鶴の一聲（他の鳥黙すと云
人成の羽言）
俳つきの俗ぶるる
風の蕭条を蕭条
冬の月 相の家はいらあ
孫の出世を若くれ 蝶男

文化十年癸酉
知恵八束盈と化す陰抜を明
蝶蝶の舞れとなりのまろかる

人生は雀の頭のごとくなる
正月ハ餅(飴)を吹やきらくなる
門松を事とせし春の宮
竹とかやそろ家ら彩たるる
時のあやたすと焦して出て来ぬ
正月の来れ上るまれ梅の花
印の目もきらきらるまに梅の花
蕾やひとりまいこはひよろすす
梅ノ喉 梅起の花や 芋ほりら
梅の空 家陽のみとなりるる
よい貧をちと吹生せ者の母
母の中に動の通りと鳴 蛙

飴まて作る玩具ホウヅキ、鳥もより
門戸の蓋まて吹きふくらす作る

華の夢さめ はすあらし 松の花
めの日の枯くらや 道の苔
床の間へ七草花の草鞋
鉢植てなるつもり田舎
桃さくひらひら と咲 赤者
田舎の生まれ中華碗の買かる
雛祭や節かまるすす 神山
やきやへまり付き菫の和
田すじの四月 雨降ら ふふふふふ

月今月一冊短冊有

一日七日の供して 松の花
り春や雑子も花まと 神へつい
華の寿めて行 二月 孫

こうけるすくつて咲菫哉

外れのみの咲てやなり藪椿

才槌をかついで来るもうの花

子雀の口も草もうるうる

多の門も雑子の弱る草鞋哉

なけ雲雀家根の板のかつる哉

鶏の午の時を告げ

蛙のしきりもちれ　東窓

蛙の口も余る春の夕哉

寛永寺を過る二句

すすもくまつる嵯峨の御堂

咲くや筆で過ぎし林哉

畑うちの血のの日は暮ぬけり

雪は三月三日のことなれば

雪の三の日うるまれて仏平哉

草の花のおくる種の行燈哉

口上もかすれく長し　桃の花

猫の後ずさる跡哉　常けい

あのまを芸豆の花　芋の花

花の銭いくら足らずも呼まれ

三三文　俳句ひちや　あれ

俳句をくる線香ゆる春の

風の長閑すみれ哉

桜山葵これはかりて春ぞ

[illegible]せてみさきさらちの[illegible]あかる
北山も黄る形[illegible]れて[illegible]
[illegible]の[illegible]めけり[illegible]寺
[illegible]あるて[illegible]の[illegible]
[illegible]

藤沢

[illegible]
藤汁や聖[illegible]
常[illegible]の祇[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]せのとを[illegible]
[illegible]の[illegible]ちて[illegible]の[illegible]の花

点の多人（北難する人）

其

[illegible]も[illegible]人の[illegible]も[illegible]から[illegible]の[illegible]
[illegible]て[illegible]雀の[illegible]も[illegible]の[illegible]人

[illegible]園の[illegible]つき[illegible]る[illegible]ん[illegible]の[illegible]
[illegible]も[illegible]や[illegible]の空[illegible]
[illegible]や[illegible]知[illegible]の借り
[illegible]酒
[illegible]の[illegible]鞋[illegible]
[illegible]
[illegible]や[illegible]
[illegible]
[illegible]

遠[illegible]の[illegible]

あ[illegible]悔や[illegible]の[illegible]舎所
山里[illegible]
松

咲ひとつしてのちちる 横移るの
花のあと馬の山耳のとり過し
悔つまかりて接く 井領越
朝は日さく そしし八月八
末3月の雲の雪のよりも松の風
きるたせよ 猫枕の動くる
しよるる 拍るまりかれ 砧
ちりの花かし後の夢世
掃出すや月の痛の中言葉
行 顧ひうすや天の川
井の中のさし秋のふる 秋の雲

曠野 まがの巻六八
ならかるも 冬日 雪月 歌の行
(ツクヒ)ふるひにてトアリ

時雨を穴かしの見う必嵩
岡雲の雲のちよこし 立りそ
雲の花のなる咲れ 出行家
松野や ちちの腰の肥を
水仙ひとつい弾く扇
もの無し 嘘 カミ 元帝 ものら
出そること 色ともそし 歯
盃ハ白日ふ月すの月
士ハ金ふ目もそし む松の紙
煤のもや岡雲のかも 塩の
野鶏 帰雲 ハカラと 忘
山雲ふ ふるまと 雲 二人 拍

文化十年 古すがし 一部

紙ふつ、あ銭し 礼金で
ふくても武家ふでは
買物の銭を紙に載せて
渡す事 明治六年頃
もえたり

文化十年戌春　甲戌

蹴の首ゆ　ふるまりと　蹴みつ
振きりの　つらさけ　足の柳　郡
まつ毎の　獨行の　やつる　異を
多賀　宵　つ　その　ゆ　水
可　れ　と　人の　吾　逝　の　月　見　ゆ　つ
ゆ　る　も　な　け　ば　な　る　獨　行　の　毎　昔
ま　う　き　の　ゆ　る　ま　る　辭　か　死
陽　炎　も　柄　枝　那　て　も　ま　ま　い　ま　す　順礼とおつても（たとへをしても　敬いを参り　なと）
俳　味　し　体　の　心　も　さ　る　の　月
さ　い　と　そ　ら　も　立　ま　す　本　仏　の　針
さ　ら　に　も　の　俳　も　め　る　ま　と

山吹の　もつて　生れ　ま　れ　う　る　の
一　枝　川　獅　子　の　ひ　る　も　振　る　る
む　る　ま　る　奴　か　た　も　玉　あ　う　る

基

若　ま　つ　と　ま　ま　と　枝　ハ　花　な
ま　ま　ま　ま　ま　な　け　に　た　見　夜
ま　な　を　金　所　な　牡　丹　の　蛍　る　る
稚　也　と　ま　ま　て　ま　る　る　花
ひ　ら　し　稚　く　寡　ま　ハ　近　て　夏　る　る　蛍
き　よ　れ　ま　か　ま　と　蛍　の　り　ま　ま　る　る

表紙の足袋

この世のう　京　しかりしよ　茶碗

文化十年甲戌　西旅　文化十年　東漫　ても　なけ　に　た　見　夜
人　を　金　所　な　牡　丹　の　蛍　る　る
稚　也　と　ま　ま　て　ま　る　る　花
ひ　ら　し　稚　く　寡　ま　ハ　近　て　夏　る　る　蛍
き　よ　れ　ま　か　ま　と　蛍　の　り　ま　ま　る　る

表紙（蝶夢の門）　京都人　江戸住
遺　ゆ　ゆ　ゆ

四まし間世ゐるや　葛花　短冊にもあり

ぬの法の姿　火ちる花こめもしは海

なく高の手柄かすや蓮臺野

はなやむら　鉢も高の人

文政六年発句題詠後世帳

名前も部　山城題

自筆一冊

よさぬたちらこの年を操やこれ

桐の木ハ一色本たちて居るもまよ

三月ばくらへて細ふ山ふ郎

鍋ふたもひとり流れて略のあり

くさくを押のけて咲芒ふ郎

お蔵のいつも寄かれ姿ハ菜

辻の樹ふ張れすふ里相模

文政十三年　一冊

先生と云ふ角力取

侍者の姿入る鉄ふ

ふるの日の会自慢ふ軍倦し

かまくらハはかりとたて姿

姿つまの手柄ふ家の西りふ

下ふの宿ふ山ふ郎

八幡の聖ふとふる時ふ

ふ鞋さへ僧むすひふ姿

桐の木ハ早今ふ郎姿

ふ兵の味しふ国の意ふ

菜屋廣しやはや宿世ぶ

老ぬふ安ふ亟してあり菊の花

一年六四アリ　壬子より癸丑の日十二日間　其内丑、辰、午、戌の四日を閏日（マビ）と云て除キ残リ八日を八専と云ひ雨多し、適マ照リ八専とも云ふ　ソッと訳けは閏日ハ影さす　京子保廿木の京法八専をくつる為の法也　其南五文字

水仙の蹴つまづいて伊勢屋
宣伝のこゆみもからてうとうとし
昔の恋の様なる事都覆れ
紅葉の様なる世間をへれてけり
仏のうるうるうるうるうるうるうる
さそはれて月も出る彩雲
門松とづくづくしさよみの山
鬼やめくらか見る松の風
冬
まつくらな奇麗な留守をつかひけり
海棠と見せようとの朝朗
大出が崩れてまつこそうるう

招霊棚に供ふ瓜茄子で作りし馬
即ち死霊たくるべん

金柑の香のもよこそ茶曰うる
十夜からおろす時うろうろ紅葉
大津絵を真面目や拙の
宝来やはとけのめの 捨て
往事の夢
あるうて世界 けり うかりひとり
鳥見せや 足りるうるは の私
呼ばるるもつかる みるあるの
煙 ゆれ 粥の煙りうるうるうる
師走といせるある人のこと
鉢叩 それも浮世 松うるる
晩 冬 又去られうる
冬と呼ばうるうるうるうる

極楽の塔のあらたし年立
山茶花も肥すと日流す蕎麦屋
上人の魂と呼ぶこうすはうの
古河のほとりの茶屋も見めよ名古屋
よるつ仏と戸の隙つくや俳の跡
引のこせ大根三本もわかれて
客ふる傾城の大根引ふる
上方も名残見る紅気ふる
空の星姫寝ぬ事よ駱駝
駱駝嵯れたりや古ちたる

文化十二 乙亥 春

うらびすの大のうらさ無るまつ
さるとそついの通るの柳の郭
小悔くも駱駝通る蛍狩ふる
世捨人と呼れるあらし
まれまれも春のひと描るれ
春雨は撫の見るの傾の
ふる永とうのはさくも おろか
朝日の射つはらう撫の立
若草も天正頃の地金つ
ひなうるやはとの尊は世が咲
嘆ぶて一茶ものるさ ふくる
逢坂の佛し 蓮たちのふる

小悔くも 小面らが悔い
小織いなど、
可なりの意あり、併し此の
句は美なる意ありて旅
人の勇壮を称うる地めて
此書文化六年秋の部
にも小悔くがあるが意
つづ小悔くがあるが意

春風の撫る頃出す山茶花の
そらから風の吹き出す時雨
床の日も黄ばんだ形や掛け菊
肩引き性な器もなければ
嘴越の枝も拙い（蕉の夢）

疝癖（ケンベキ　ケンピキ）

蕉の葉不二さく多きなる
風雅くもとはなれ花の袂
なる百のうれせ蕉や新の苞
蕉はれ雨のあたりをひ蛍
他ならず蕉の陰なる麦湯の
蜂ならといふ外いなし

堀田川道遥

いされ〳〵と葦咲まけり
湯炎のまに〳〵陰む葉けば
湯炎のやうに陰書の此ろの
ひい画図を写かしたいと
芦のくら面る花のいう邪

芝居口調

蕉

朝日の月の白しや夏こころも
しうきくさる茶せもみさら世重
自我の蕉の梅すあやめこの
十はかり深〳〵過てる嘆こころの
一本い青面笠す　柱の邪
蕉よす唐めく陰青の面ろの

姥

さる姥の小屋の妻も姥芭蕉
往来もまろめと思や高の月
用のある人とぞ見て過ぎぬ

病中

ふれさもらふらもさの底ひより電
やししも懲すもつせて居るまゝ

病後

居のあり方ことまりい姥の
枝栗や新蕎麦なめるまゝ
いれ人ハ紅のいきれて居る業たけ
毛月怪まする方なる光りけり

甲州の醫長田德本十八文字藥代
文化年間三代目徳本と稱す、甲州菊
新培を教へ今日に成す、甲州菊
徳本と称す、紅白菊の例
寛永七年二月十四日百十八才歿

元

毋田や捨てやうなる月
十日を黄色の門や山かけ
塩なめ〳〵年を通るも
百年もるて

黄色い聲（ウグイス）
後嘗た（少し）

門のうちと指て往き来
毒蛇も毒て蛇てし姥葉道
隙間を蛇の蛇の義越
切るまゝを蛇もたゝまし蛇の蛇
立ぬ〳〵姥可ちひか
六一ヨ蛇の前やし
口切とまいひとも

遠江東海道掛川と伐衣井の
間より北へ入る秋葉社冬詣道

佛樓

無会と隠れ家を大しけんーれ
柳原紅葉らく多なり年と
おもしろし高野の中の佐てみそ
甘酒を飲む門もちる松のうる
抵抗するみるの鳥や小傘原
松芝るハ明てもをれとうる
狀れて一る庵立とし(の)る天気ぶ
岸国つ一蕨のハ小を桜の花
鄙きハかゝることも

江戸ケ住刑場

山茶花ハ松やこの夏とうの古り
図西の壁を春中や 左牡丹
竜菊ハとゝしやとち花中ケ

文化十三年
西歌仏

小河の繪馬ちの石や石蔵の花
縁側の針飛生れ石蔵の紀
光悦かを幣の端もい蕣花
鬼の蕣刈らあるから施主ケ
小住居の紅多な引蕣ケ
松白のけさをまるを宝ちや
細紙の中間ケ来ける鳥ケ
今の春慶長頃の白ひとうよ
柳桜花 家修のひとゝきんぐ
新ひとり蕣ケ蕣ケ植みケ
月の松い古柏ケ多りすちケ
紅みケ小言のうちる時ケ

本阿弥光悦刀鍔鑑定家之
諸技に長ず、画は色彩よ
く草木画多し

きくたなかさはらいたし をるやうひ
をるもうかさ時つたく用（以下
安の中に伊かしるゐ足袋の宗
庵柿といはれて安る一部かるる
宗今義とあるあく戈をとろ、あるる
田舎先のうつて結ぶんゐ時ろひ
逗留ゑのうつかりひよんと天先かる
大内ゑ殘菊の宮を群臣諸を賜し盃を塗と重陽のめしそ
地下に時日の定あく時ゑ宗行ゑ
五日まで行ても先ず菊の宮あ
出業ゑ門ゑつ文ゑ鳥ゑ
十月の空を抱へるゑうゐ

きこりの酒ゑすん二りの月
寄つけを与らくする云先ゑ
岩窟と逃しゑ尾かゑのゑだ
ゑゐたくゑゐ文 孜子ゑ
ゑ埋ゑこれり佐人間とゑ
はゐめゑ草段ゑ蟹ゑ
川の段ゑ咲ゑ
みろうるゑ引ゑ
ゑく舌ゑ搭ゑ保ゑり
ろゑすゑ煙りゑ
わひしさ
ゑ住
ゑからしゑけらるゑ

文孜子（八文七銭で食たり食は
ゑたりゑどの俚語あり）安物
無知とゑふゑであろう

江戸ちかもいけどざらの時のまり
おりやゆ存在ゾンザイする時時すまり。

沉香も焚す

屁もひらず一日すること
沉香も焚す屁もひらず（俚言）
（進てあゆまず退てあゆまず在箭）

時家例の十三日れ納
君子紙の懸流れ沢田川

送

大正十年十月九日夜　高橋徳治宅を写し了ぬ十一刻
世尊を写了。

他石

岩本家写

知足坊
一雫の句
拾

水墨画

文化八年

文化九年

文政十年　山城

文政十二年

文化十年

文化八年

文政七年

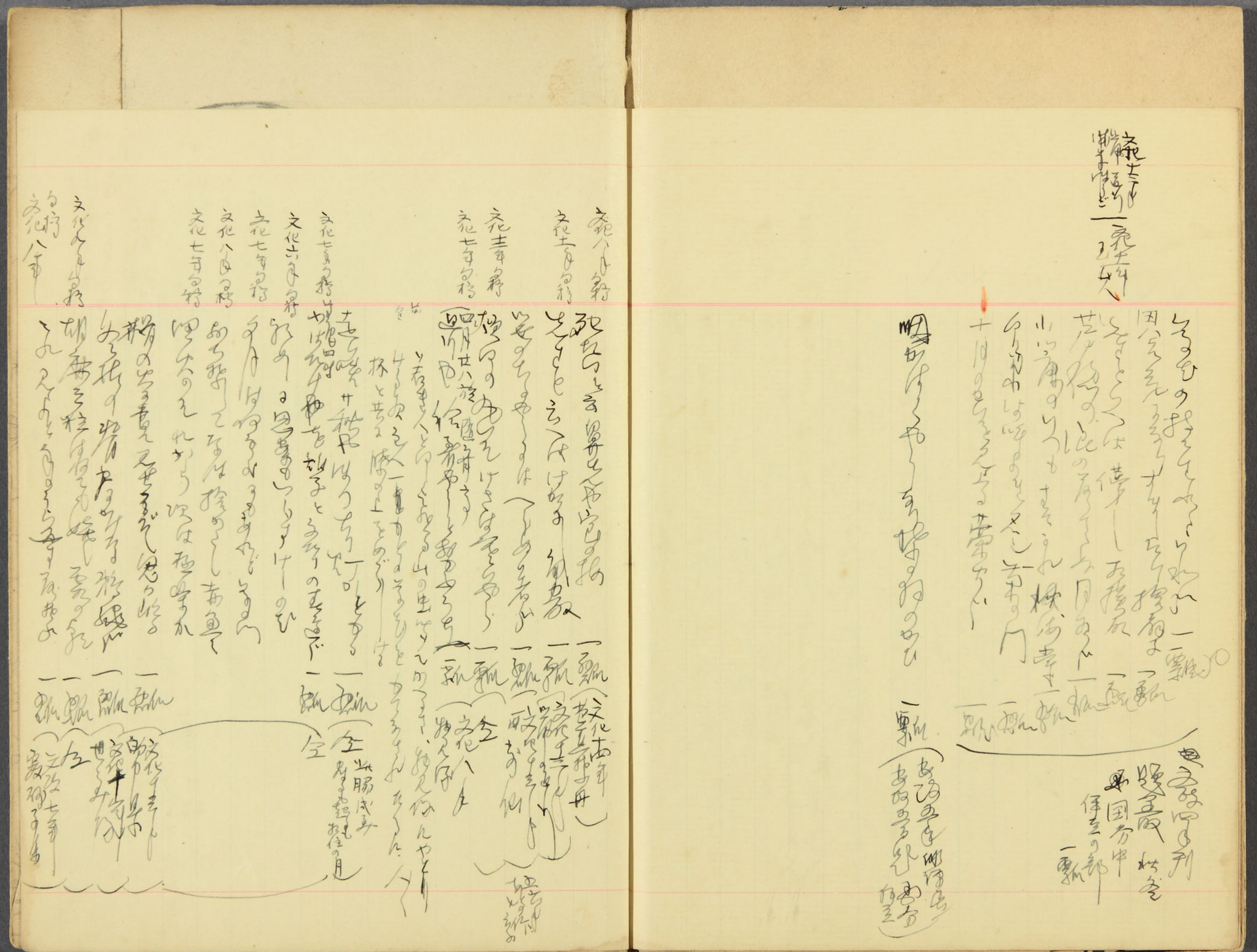
長崎市中を走る　一冊

見もの

一冊

一冊

一冊



挿絵紙問

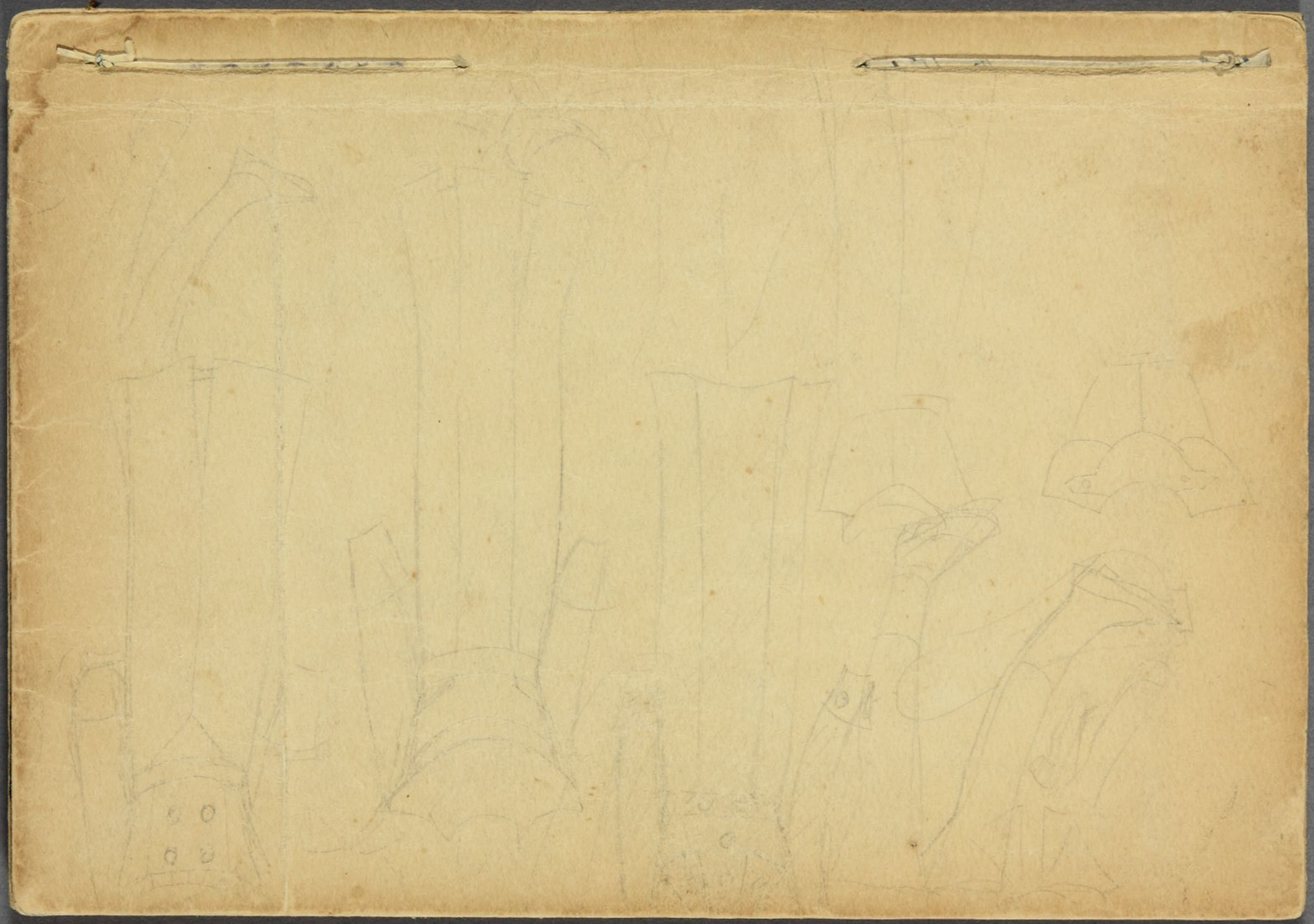
（第四四句の[illegible]の字[illegible]のこサ字入レアリ事 一瓢）

錦とこそ[illegible]のとまりやまる色 一瓢（文化元年九二）

廿日[illegible]の[illegible]の[illegible] 一瓢（[illegible]）（全上 [illegible]）

我一の[illegible] 一瓢（[illegible]）

綠風 錦と[illegible] 一瓢 [illegible] 全上 完了

清水の吐にひらく[illegible]の[illegible]

[illegible] 一瓢（文政十年[illegible]）（[illegible]千部）